

「あれがデネブ、アルタイル、ベガ、君は指さす夏の大三角、おーぼーえーて空を見る♪」
事務所のソファで雑誌を捲りながら、イヤホンから流れてくる歌に合わせて、私も歌詞を口ずさむ。この間レコーディングしたアルバム「jewelries！」に収録された、奈緒がカバーした楽曲『君の知らない物語』。

恋心を誰にも伝えず、胸の内に秘めておくことを選んだという内容で、なるほど奈緒にピッタリの選曲だと思ったものだ。一見男っぽくがさつそうな奈緒は、その実トライアドプリムスの三人の中で最も乙女で純情なのだ。本人は顔を真っ赤にして否定するけど、それこそがみんなに弄られる要因であり可愛いところである。

勿論キャラクターだけでなく、それ以外にも奈緒の容姿、声の質、アニメ好きという背景など全ての要素を考慮したうえで、神谷奈緒というアイドル像にマッチしていると感じたし、事実本人もすごく嬉しがっていた。

今日事務所にプレス版が届けられたこのアルバムには、他のアイドル達と、そして私も参加させて貰っている。当然各々のアイドル像に合った曲が与えられていて、かなり良いアルバムになったと我ながら思っている。

ただ、一つ言わせてもらえらるなら、私にはもう少しアップテンポのノリの良い曲が欲しかった。正式にCDデビューしたとはいえ、まだ一枚だけの駆け出しが要求できるわけがないのはわかっているけれど。

今回私がカバーした曲はしつとりと聞かせる系統の歌で、曲自体はとても素敵で気に入っている。だけど、同じような方向性のデビュー曲と合わせてみると、私のアイドル像がはつきりと理解できてしまうのだ。正確には『北条加蓮というアイドルの売り方』が。

確かに、私が身体の弱さからアイドルになることを諦めかけていたことは事実で、今でも体調を崩すことがあることも否定しない。そして、その背景から『病弱を克服して頑張るアイドル』のイメージを着せられていることも。

アイドルどころか、人生さえ挫折しかけた私は結構擦れているところがあって、そのあたりまっすぐな凛と違い、割り切って事務所のお惑を受け入れている。でも、成長して身体も常人並みに近づいてきた私としては、如何にもな弱々しく儂げなイメージより、克服したという強さの部分を押し出して欲しいという想いもある。

私の場合、わりと誰はばかることなく思うさまを主張する傾向にあるけど、この葛藤は流石に大っぴらには口には出せないでいる。さしずめ、今聴いている奈緒の曲でいう『私だけの秘密』ということになるのかな。そこまで仰々しいものじゃないけど。

「けど、上は見抜いているんだろなあ。ウチのプロダクションスタッフ、そういうところは鋭いから。まあ優秀と言えるんだけど、いいように動かされている感がちよつとねえ」

見た目は華やかなアイドルだけど、したいこと全てが出来るわけではない。むしろ、意にそぐわない仕事の方が殆どだ。歌いたいのにはモデルの仕事が入ったり、踊りたいのにバラエティ

番組に呼ばれたりなどするのは良い方で、本気で嫌だと逃げたくなくなるような内容の仕事だとしても、契約が交わされた後であれば笑顔で赴かなければならない。記憶にあるところでは、幸子のスカイダイビングや乃々のバレンタイン、時子さんの制服モデルあたりか。あれ、幸子は嫌がってたんだっけ？

ともあれ、仕事である以上はしかたがないし、それでもこなしていくことが芸能界に生きることだと理解している。だから、その点において私の憂いは、贅沢だと殆どの人に言われると思うけど、こちらからすれば、そういつたチャレンジブルな仕事こそいろいろやってみたいところなのでお互い様である。

とどのつまり、隣の芝生は青い、というところなんだろう。曲の件も、アルバム共通曲『ギゲン Party Night』は良い感じで楽しめたし、客観で見れば要望はわりと通っているとも言える。なので、現時点でこれ以上は高望みというものだろう。とすれば、望む仕事を貰うには、まず与えられた仕事をこなしていくしかない。それが王道で近道。他人を羨んでも始まらない。

そう考えを切り替えたところで、私の前のテーブルに湯気を立てる白磁のティーカップが、それに劣らぬ白い手によって差し出された。

「プリヴェート、カレン。ソチャですが、どうぞ」

流暢なロシア語と相反する片言の日本語で声をかけてきたのは、今回のアルバムで一緒に仕

事をしたアーニヤちゃんだった。十歳まではロシアで育ったという彼女の日本語はとても危ういのだけど、今のは正しく使われていた。真面目で聡い彼女のことだから、きつと千尋さんあたりを手本に憶えたのだろう。けれど、それが悪い方に働くこともあり、みくや蘭子辺りのキヤラ作りやネタ言葉を真剣に捉えてしまったりするので、変なことを憶えないかと心配な面もあったりする。

なので、私が側に居るときは一応その辺りには気を配っていたりする。まあ、今は事務所のスタッフさん達しか周りに居ないからそこまで警戒する必要もないので、肩の力を抜いてお茶を受け取ることにした。

「ありがと、アーニヤちゃん。ええと、すばしーば、だっけ？」

「ダー……はい。どういたしまして」

うる覚えのロシア語が間違っていないかかったことにほっとしつつ、プレーヤーを止めイヤホンを外す。

「カレンが歌っていたのは、ナオの曲、ですね？」

テーブルにお茶請けのチョコレートと自分のカップを置いて、対面のソファに座ったアーニヤちゃんが問い掛けてくる。

「つと、聞かれてたかあ」

「はい。ナオの歌、素敵ですが、カレンが歌うのもニチエボー……悪くない、ですね」

夢を見た。

淡い光が星の海のように広がる真つ暗な空間。その中で一際強く、太陽のように輝くスポットライト。その光が照らすステージには煌びやかな衣装に身を包んだ少女が二人。彼女らが歌い、踊るのに合わせるように星々は波のように揺らいで跳ねる。

子供の頃から何度も見た夢だ。

ステージの彼女らが歌う歌や、会場を埋め尽くす光の色。それらが毎回同じなのか違っていいのかはよく覚えていないけれど、一つだけずっと共通している事がある。

その夢の中で、いつだってステージの上に立っているのは彼女らで、そこに私の姿は無い。

星の海の中。時にはステージに一番近い所で。時にはステージから一番遠い所で。

アイドル——そう、彼女らはアイドルで、私はただの観客の中の一人。

小さい頃はアイドルに憧れていた事もあったはずなのに、夢の中ですらステージに立てないだなんて、なんとも自虐的な夢だと思う。

或いは、そんな幼い頃からもうそれは叶わない夢だと、どこかで納得してしまっていたのかもしれない。

そしてまた、幕が下りる。

夢が終わる。

あの幕の向こう側を、私はまだ知らない。

☆

私には自分の部屋が二つある。

そういう事を言うと、大抵の人はお金持ちで家が広かったりするんだろうか、というような感じの反応をするのだけれど、残念ながら我が家はそこまで裕福という訳ではない。

家の中に自分の部屋は一つしかないし、これといって余っている部屋もない。部屋の数も大きさも周りと変わらない、極々普通の家だ。

それなら別荘とか、なんて風に言われる事もあるけれど、別荘なんて持っているような家なら、そもそもそんな普通の家には住んでいないと思う。

とはいえ、別荘というのは当たらずとも遠からずといったところで。果たしてあれを——自分の家でもない、もつと言えば家でもないあの場所を別荘と言えるのであれば、だけれど。

「自分の部屋、か」

ぼつぼつと雲が浮かぶ空を眺めていた視線を室内に戻して、ぐるりと部屋の中を見渡す。

今自分がいるベッドの横には床頭台と、そこに置かれたテレビ。ベッドを挟んだ反対側には椅子が一つあって、壁際にはロッカーがある。床頭台とロッカーこそ木目調のそれではあるけれど、それ以外——壁紙もカーテンもシートも枕も掛け布団も、全てが見事に真っ白。

個性も何もないこんな所が自分の部屋だとは多分に憚られるのだけれど、残念な事にこのべ

ツドの寝心地も、テレビのリモコンの扱いも、窓から見える殺風景な景色もすっかりと慣れてしまっている。

何もそんなに引つ張るような事でもない。ここは病院で、病室で、パジャマ姿でそのベッドにいる私は、紛う事なき病人だった。

「結構久しぶりだと思っただけど、またこの部屋になるとか。先生も絶対わざとだよね」

何度目になるか解らない溜息で重くなった空気を振り払うように、慣れた手つきでリモコンに手を伸ばす。

ヒューイイイ……と小さな音がしてから少し間があつて、最初に映ったのは見覚えのない情報ワイドショーだった。

「暫く見ていない間に新しくなったのかな。全然知らなかった」

丁度昼過ぎというような頃合い。同年代の他の人よりかはこの時間帯のテレビ番組に詳しいと自負しているが、何せ普段この時間は学校に行っているのだ。全部を全部把握出来ている訳ではない。

「……微妙」

そのまま暫く見ていたけれど、どうにも肌に合わず、適当にチャンネルを変えていく。

とはいえ、この時間にやっている番組はどれも似たような内容で、そうそう差違は無い。

それでも見ていて面白い番組とそうでない番組があるのは、番組の作りが悪いのか、セット

が悪いのか、出演者が悪いのか。

「あー、これも司会の人変わったんだ。ちよつと残念」

四つめ辺りで見慣れた番組が映ってリモコンを置いたものの、それも自分が覚えているのは少し変わっていて、こういう番組も色々変わるんだなあ、とそんな事を思う。

画面の中では、街中の今話題のドーナツの店だとか、どこかの地方で開かれている自然体験の様子だとか、そんな感じのゆるい話が続いていく。

芸能人の熱愛だの結婚だの離婚だの、そういうのも面白くないとは言わないけれど、他の番組ではあまりやらないようなそんな内容が好きだったので、この辺りの雰囲気が変わっていったのは、ちよつと安心。

そうして見ていく内に、話題はアイドルの話へと変わっていた。

それもこの番組だからか、取り上げられたのは既に誰でも知っているような人の話ではなくて、つい最近デビューしたばかりの新人アイドル達だった。

大アイドル時代とも言われるこのご時世。男女を問わずアイドルの数は本当に多く、こうして新人も次から次へとデビューしていく。

とはいえ、その中から次のステップへと進む事が出来るのはほんの一握り。更にその先へとなれば、それこそ砂漠に落とされた鍵を見つけるような確率になるのだろう。

きらびやかなイメージとは裏腹の、激しい競争が日々繰り広げられている。そんな中で、そ